

「ひどい苦しみの中でも」

聖書：テサロニケの信徒への手紙一第1章1～10節

牧師：秋山 義也



- ・祈りをもって、メッセージを始めます。

主なる神様

私たちが、今日、あなたに呼び集められ、互いの生を確認し、あなたの御名をほめたたえる幸いをいただいていることを、心から感謝いたします。会堂礼拝原則休止から、それぞれの時を過ごし今日、再開するという恵みに与りました。これまで教会が礼拝する場であること、毎主日共に集えること、当たり前のように考えていました。しかし、それができなくなった時、私たちの教会とは、主の日の礼拝とは、一体なんであるのか、皆がその出来事の前に立ち、問いかけられ、今日を迎えています。新型コロナウイルスによる感染は、私たちの住むこの国では終息に向かっていますが、第二波、第三波が起きている地域があります。また世界的にみて、まだまだ予断のゆるさない国や地域があることを思います。その病によって今尚苦しむ人たちがおり、看病する者、闘っている隣人がいることを思います。愛する家族、友人を失い、深い喪失感の中過ごしている方もいるでしょう。感染予防の観点から、私たちが今までできていたことができなくなる。そうした変化の中におかれ、やむことのない緊張と不安が私たちの只中にあることも心に留めています。

今日、私たちは礼拝再開の喜びに与っています。再び会う事ができた、互いの消息を尋ねることができた、と安心の思いが与えられています。しかし、この喜びの出来事を、私たちだけのものとするのではなく、主イエスによって、広い、また深い愛の出来事へと至らせてください。今日、まだ礼拝に集う事の適わなかった友がいることを覚えます。日本中で、世界中で、礼拝を再開できない今日を迎えている教会があることを思います。経済的、社会的、様々な痛みの中で過ごしている方がいることを思います。誰にも相談できず、深い孤独から、いのちを乏しめる悲しい事件も起きています。1つの差別の出来事が、現実にある分断と格差、支配と被支配の構造をあらわにし、暴力と暴力による、駆け引きも起きています。どうか、主よ、私たちがその痛みの声に敏感に生き、そのいのちと平和を覚えて祈ることができるように助け、導いてください。私たちに今、何ができるのか。隣人を自分のように愛し、あなたの敵を愛しなさいと言われた主イエスの言葉が深く沁み込んできます。あなたに呼びかけられている私が、キリストの教会である私たちが、あなたの平和と愛を表す器として用いられていけるように、今、私たちと共にあってください。

この間、与えられた新しい出来事に感謝します。ライブ礼拝を通して、つながっている友がいます。会堂礼拝の再開を共に喜びます。そして、信仰において、霊と魂において、場所は違っても時同じくして心合わせて主に感謝を祈り、共に賛美を献げます。今から解き明かされる神の言葉、福音の言葉によって、私たちがますます一つにしてください。希望を待ち望み、共に歩むことができるように導いてください。主イエスのみ名によって祈ります。アーメン

・使徒言行録から、テサロニケの手紙へ

本日から、テサロニケの信徒への手紙を共に学びます。先週まで使徒言行録を学びました。主イエスの復活から、使徒たちが聖霊の風を受け、世界中に散らされ、主イエスの福音を宣べ伝えた、その始まりのところに共に読みました。そして使徒の中で、パウロという人が起こされ、使徒言行録の後半は、彼の伝道の歩みがイキイキと描かれています。そして新約聖書に収められている4つの福音書、使徒言行録の後、ヨハネの黙示録を除いて、手紙のジャンルになります。その多くが、このパウロから、伝道したそれぞれの地域の教会、キリスト者に対する励ましと祈り、感謝と賛美に溢れた福音的手紙であったのです。本日、ご一緒に読みましたテサロニケの信徒への手紙は、すなわち彼が、テサロニケの町の教会に宛てた手紙、ということになります。

・先週、私は35才になりました。バースデーカードやメッセージをいただきました。誕生日おめでとう。その言葉から、生れて、生かされてきたことへの深い感謝の思いが込み上げてきます。手紙を書く、ということは、普段あっている人同士で、このように感謝を述べ合ったり、人生の四季折々において、挨拶をするものとして、様々なメッセージのツールが生れた現在も有益です。私たちが一人ではない、と励まされるものです。

それに対して、パウロの手紙は、物理的に会うことのできない、そうした人々に対しての手紙でありました。使徒言行録第17章において、パウロは、マケドニア州にあるテサロニケを訪問しています。その前の章において、マケドニア人の幻「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」（使徒16:9）という言葉に出会い、心動かされての来訪でした。そのテサロニケにおいて、神の言葉を聞き、主イエスを救い主と信じる多くの人々との出会いがありました。一方で、彼らのことをよく思わない人々、ユダヤ教徒や異教の神を信じる人々によって迫害が起きたのです。暴動がおき、町は混乱を極めました。その町にとどまることができなくなり、パウロたちは次の町に出かけていき、しばらくして落ち着いたコリントの町において、テサロニケの町で出会ったキリスト者たちを思って、手紙を書いたのです。

会いたくても、会うことのできない状況がある。今、わたしたちも事情は違いますが、会いたくても会えない現象は、この時のパウロとテサロニケの人々と同じです。しかし、この会えないという状況において、彼パウロから届く信仰のメッセージは、大変イキイキとしたものでした。1節、父である神と主イエス・キリストに結ばれているテサロニケの教会へ。あなたがたは1人ではない。神がいつも共にいる、という言葉です。そして、恵みと平和があなたがたにあるように、と祈りの挨拶が続きます。迫害、暴動の起きた町。そこで共に苦しみの体験をした彼らに、まず平和と恵みがあるようにと語る。散々な目にあいました。もう行きたくありません。という言葉ではなく、そこにある痛みを思い起こしながら、尚平和があるように。恵みがあるようにと祈ることができる。これが私たちキリスト者、イエスにつながる生き方なのだ学ぶのです。

続けてパウロは、祈りのたびに、テサロニケの友人たちのことをいつも主に感謝していたこと。そして彼らが信仰によって働き、愛のために労苦し、主イエスに対する希望をもって忍耐していることを、父である神の御前で心に留めていると語りました。「信仰と希望と愛、この3つはいつまでも残る。」（Iコリント13:13）とパウロはコリント教会の人々に向けて語りましたが、テサロニケの人々にも同じように語りました。信仰・希望・愛。この3つが分かちがたい、1つのものであることが強く伝わってきます。

私たちが今日、大事にしたい信仰と希望と愛のことがら。それは、他者のことを覚えて生きるということです。他者からの思いや感情、心の声、言葉を大切に受け止めるのです。忘れないで、心に刻み、「共に」主に祈る言葉とされていくことです。

5月の会堂礼拝原則休止中だけでなく、3月から私たちの教会では、祈禱会や家庭集会、教会学校もお休みになっていました。これらの共に聖書から学ぶ集いというのは、互いの声を聴きあう、大切な時間であったこと。そしてそこで聞いたことは、毎日の祈りにつながっていたことを思います。その人だけでなく、隣人のこと、家族のことなども含めてそうです。それに代わって、この4月から、証しのリレーを始めています。共に集うことが適わない方々から、近況やどんな思いで毎日を過ごしているのか。老若男女の思い。待ち望む思い。奮闘する思いを伺うことができることを、信仰によって励まされ、愛によってその重荷を負わせていただき、祈りによって、その1人ひとりとの出会いと、言葉を心から感謝しています。本日、O兄からの証しがありました。私も子育て中の者として、思い通りにいかない連続に日々、直面させられている一人であり、大変共感させられました。そしてO兄の証しの中に、子どものことが理解できるように待とうという気持ちが与えられていることを受けて、今日私たちがいただく「主イエス・キリストに対する希望を持って忍耐」

(1:3) することは、正にこのことなのだ気付かされるのです。私たちが、誰かのことを待つことができる。一生懸命やっても、どうしようもならないこともあります。でも、何かを待ち望むことができる。一方的に判断して、これが悪い、あれができないと嘆くばかりでなく、忍耐…忍んで耐えることができる。それは主イエスからいただく希望があるからです。主イエスの復活の出来事に、私たちは今何度でも、立ち帰りたいのです。十字架の死を受けて、もう終わりだと思っていたところに差し込んできたいのちの光。ああ、死は終わりではなかった。主イエスから一度離れた弟子たちは、待つ者とされ、主イエスにもう一度招かれ、再会し、新しいいのちの希望に生かされ、福音を宣べ伝えたのです。彼らが主を選んだのではなく、主が彼らを選んだのです。(4) そして、今、ここにいる私たちも、主から招かれ、再会の恵みに与る者です。待つことに心開き、主から与えられる希望の中を共に歩みたいのです。

・テサロニケの人々に、福音が宣べ伝えられたこと、偶像から離れて生けるまことの神に仕える者となったこと、すなわちキリスト者として生き、教会が建てられたことを、パウロは喜びに満ちて語りました。彼らのいるマケドニア州、近くにあるアカイア州に至るまで、キリストに倣って生きている、模範として伝わっている。そうした福音の生き方が伝わっていることを喜んだのです。

しかし、パウロは、ここで、「ひどい苦しみ」があったことも、テサロニケの人たちと共に思い起こしながら語っています。(6節) この苦しみが具体的に何を指すのかは分かりませんが、いのちの危機に瀕した苦しみであったことは想像に難くありません。使徒言行録第17章にあった暴動の出来事。迫害の出来事は、体と心が傷つけられ、そのまま放置されてしまうような痛みの出来事でした。違いを受け止められない人々による、「私たちが正義」と称した行いによるものでした。彼らキリストを信じる者、宣べ伝える者たちが一体何をしたというのでしょうか。その存在が、赦せないとされたのでした。こうした敵意、憎しみ、ねたみに対して、彼らはひどい苦しみを負ったのでした。

私たちは聖書の言葉に、心からの慰めと励ましをいただくのです。よかったことだけでない、苦しみの事がしっかりと書かれてある。苦しいことがあったよね。あれは水に流して忘れましょう、ではなく、確かに、傷んだよね。その苦しみ、痛みにしっかりと向き合う、いのちの言葉に満ちているのです。

私たちも、この間、いろいろな選択の中で、それぞれに迷いや不安、苦しみの出来事を受けて、歩んでいます。教会のこともそうでないことも。またコロナのことだけでなく、既に起きていた分断や格差のことがら、いのちの優劣によって差別が起き、痛みを抱えている人たちがいます。おなじいのち、おなじ人間なんだと、世界中の呻きの声が、私たちの心の芯に響いてくるのです。私たちも、聖書から学ぶ生き方、信仰と希望と愛の生き方により、その声を忘れてはなりません。苦しみがある。そのことを、むしろ赤裸々に主に明らかにして、尚共に主に拠り頼みたいのです。今、それには触れたくない、触れられたくないという苦しみもあるでしょう。私たちは愛をもって、その心を大切にし、希望をもって、その人の時を待ち、信仰をもって、祈りたいのです。

そして、私たちはひどい苦しみの中でも、喜びの出来事が備えられていく。聖霊によって（6）御言葉が、真実の生きた恵みの言葉として迫ってくる、その日が必ずくることを大いに証ししたいのです。

この会堂礼拝休止から、今日、私たちは、再開（再会）の日を迎えました。この間、私は複雑な胸中でもありました。積極的に休んでくださいと伝えながら、新しく礼拝に来られる方がいる。それを心から喜んでいるだろうか、表していいのだろうか、と思うことがあったのです。しかし、この間、多くの教会の友から、親切や労りの言葉、教会を愛し、また何かできないか、という言葉、御言葉が本当に救いですという励ましの言葉、また会いたいという希望の言葉をいただけてきました。会堂礼拝休止の期間は、1人ではない、と心強められた時でした。聖霊による喜びの出来事が確かに私にあり、そして今日、私たちは喜びに共に与っています。御言葉に共に励まされ、ひどい苦しみの中でも、いつでも喜びの出来事を待ち望みたいのです。新しい出会い、主の招きを楽しみつつ、共に生かされていきたいのです。

「ひどい苦しみの中でも」5/10の巻頭言で、私は星野富弘さんと主イエスとの出会いに触れました。それぞれに苦しみがある。でも、そこから見える景色がある。喜びの出会いがあることを学びます。それを読んで、本日のメッセージを終わります。

「苦しみの中での出会い—星野富弘さんの言葉—」 牧師 秋山義也

*「この状況がいつまで続くのだろうか…」と、今多くの人を感じているでしょう。その思いから私が振り返るのは、星野富弘さんの言葉です。星野さんは、学校の先生をしていました。ある日体育の授業の際、宙返りを行い、首から落下。以後首から下が動かなくなりしました。24歳の時です。考えることや聴くことはできる。でもその他のことは、他者の手助けなしにはできません。病室で、何度も死にたいと思ったそうです。その時抱いた苦しみについて星野さんはこう語っています。「人間にとって、いちばんの苦しみは、「今が苦しい」ということよりも、この苦しみがいつまでも続くのではないかと不安になることです。」(『いのちより大切なもの』(いのちのことば社より)。今、私たちの心に沁み込んでくる言葉です。

*ある日星野さんの病室に、大学の先輩がお見舞いに来ました。「ぼくにできることはこれしかない」と聖書を届けてくれたのです。ある日星野さんは母に頼み、聖書の言葉に出会いました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（新約聖書/マタイの福音書 11 章 28 節）。先行きが見えない日々、心が疲れきっていた星野さん。どんな最新の医療でも治せなかった自分の身体。助けてくれる人などいない…そう思っていました。しかし、この聖書の言葉が星野さんの重たい心の中に、温かい何かを湧き起こしたのです。「私が神さまをまったく知らない時から、いずれ大きな苦しみに遭う私のために、このことばを用意してくださっていたのだと、深い感動を覚えました。あの時から、空が変わりました。私は独りではなく、空が、神さまが見ていてくれると思うようになったのです。」この言葉との出会い、いのちの対話を経て、星野さんは「生きるという仕事」があることを見出します。「首から下のできない自分」と共に、「首から上でできる自分」を朗らかに受け入れ、口に筆をくわえて、「いのちの詩」とイキイキとした草花たちを描き続け、その詩と絵に多くの人々が慰められてきました。「私はたまたまこんな大けがをしましたが、だからといって私だけが特に大変というわけではなく、人は皆それぞれ他人にはわからない苦しみや悲しみを抱えています。大切なのは、それをどう受け止めていくかということではないでしょうか。」苦しみの中で出会った尊いいのちの言葉に今、私たちも学びたい。そして共に「生きるという仕事」に励みたい。星野さんの詩を是非声に出し、詠んでみてください。

「毎日見ている 空が変わった 涙を流し友が祈ってくれた あの頃 恐る恐る開いた
マタイの福音書 あの時から 空が変わった 空が私を見つめるようになった」

